香川県立保健医療大学リポジトリ

一人暮らし高齢者を支える地域住民の支援の特徴

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 合田, 加代子, 高嶋, 伸子, 太田, 武夫, 篠岡, 有雅 メールアドレス: 所属:
URL	https://kagawa-puhs.repo.nii.ac.jp/records/137

香川県立保健医療大学紀要　第3巻，17-22，2006

一人暮らし高齢者を支える地域住民の支援の特徴

合田 加代子[1)]*，髙嶋 伸子[1)]，太田 武夫[1)]，篠岡 有雅[2)]

[1)] *香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科*
[2)] *綾川町地域包括支援センター*

A Characteristic of Support of Local Inhabitants Supporting Elderly Living Alone

Kayoko Gouda[1)]*, Nobuko Takashima[1)] and Takeo Ohta[1)]
Yuka Sasaoka[2)]

[1)] *Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences*
[2)] *Ayagawa-cho Area Comprehensive Support Center*

要旨

本研究は，B町が高齢者支援のために結成した住民組織である相談協力員の活動から，一人暮らし高齢者が住み慣れた地域で暮らすための支援の方策を検討することを目的に実施した．まず，相談協力員へアンケート調査を行った結果，積極的に活動している姿が確認できた．次に，相談協力員によるグループワークで出された意見を基に日頃の活動を分析した結果，【暮らしの中での安否確認】，【近所付き合いの中での身近な支援】，【身近なネットワークづくり】が支援内容の特徴であることがわかった．しかし，相談協力員の活動は，近所への気遣いや【葛藤を抱えての役割遂行】であることも明らかになった．今後，地域で一人暮らし高齢者を支えるためには，住民が行う支援の特徴を活かした協力体制の整備と支援者である住民への支援という課題について検討することの重要性が示唆された．

Key Words: 一人暮らし高齢者（elderly living alone），地域（community），支援（support）

*連絡先：〒761-0123　香川県高松市牟礼町原281-1　香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科　合田 加代子
*Correspondence to: Kayoko Gouda, Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences, 281-1 Murecho-hara, Takamatsu, Kagawa 761-0123 Japan

序　文

わが国では，後期高齢者・一人暮らし高齢者が急増している[1-4]一方で，国民の意識や家族観が子供との別居志向や介護の社会化を容認する自立志向へと変容しつつある[5-7]．このため，われわれは脆弱化後期高齢者の我が家での一人暮らしを支える要因に関する研究[8-10]を行ってきた．その中で四つの要因，すなわち，高齢者自身の一人暮らしに対する考えや意志などの根底となる【人生に対する意識】，一人暮らしを成し得るために高齢者自身が【持ち合わせている能力】，一人暮らしを支えるための【他者との関係性】および【社会的基盤】が我が家での一人暮らしを支える重要な要因となっていることを明らかにした[9]．

このようなことから，本報では，とくに一人暮らしを支えるための【他者との関係性】および【社会的基盤】の２要因に焦点を当て，一人暮らし高齢者が人との交流を保ちながら，住み慣れた地域，我が家で暮らすための支援について検討したいと考えた．

そこで，A県の山間地域にある合併を直前に控えた高齢化の進行した町[11, 12]であるB町の“相談協力員”の活動から，地域住民ならではの支援の特徴を把握し，一人暮らし高齢者に対する支援の方法論を導くための基礎的資料を得ることにした．

対象および方法

１．対象地域の概要

対象地域であるB町の概要は，表１に示したように，人口密度が93.5人/㎢と低く，一部の中心部以外においては隣近所が離れている点や，持ち家比率が96％と高い点，公共交通機関の整備が乏しいという点に山間部特有の地域特性がみられる．高齢化率は33.5％，高齢者のいる世帯は68.4％にも及ぶ高齢化が進行している町である．さらに，一人暮らし高齢者のおよそ70％は後期高齢者である．これらのことから，B町の一人暮らし高齢者は，地域社会との交流が持ち難いという生活環境の下，我が家を守りながら暮らしているという姿がうかがえる．

表１　B町の概要

項　　目	データ
人口*1	6655人
世帯数*1	2048世帯
１世帯当り人員*1	3.3人
持ち家比率*1	95.9％
人口密度*1	93.5人/㎢
高齢者数*1	2196人
前期高齢者数*2	954人
後期高齢者数*2	1242人
後期高齢者数/高齢者数	56.6％
高齢化率*1	33.0％
高齢者のいる世帯数*1	1423世帯
高齢者のいる世帯数/世帯数	69.5％
一人暮らし（独居）高齢者数*2	178人
前期高齢者数*2	57人
後期高齢者数*2	121人
独居高齢者数/高齢者数	8.1％
独居後期高齢者数/独居高齢者数	68.0％

2004年現在

*1香川県統計情報データベース
http://www.pref.kagawa.jp/toukei/
*2 2004　綾上町独居老人状況調査資料

２．調査対象

今回の調査対象である相談協力員とは，B町の高齢者生活総合支援体系の１つとして2004年に結成された組織の構成員のことで，民生委員，保健福祉委員，郵便局員等44人が自治会毎に任命されている．この相談協力員は，自分の居住地域の一人暮らし，虚弱，寝たきり等要援護高齢者世帯を担当し，見守りや相談活動を担っている．

３．調査方法

相談協力員の一人暮らし高齢者への関わり方や考えを知るために，まず，アンケート調査を行った．内容は，①性別,②年齢,③相談協力員の経験年数,④健康状態,⑤一人暮らし高齢者担当数,⑥一人暮らし高齢者への日頃の関わり方（選択式），⑦一人暮らし高齢者への今後の関わり方に対する考え（選択式）である．

次に，カードを配布し，一人暮らし高齢者への支援の内容と関わり方に対する各自の考えについて，自由記述を依頼した．その後，地区別に５つのグループを構成し，グループワークによって出された意見の集約を依頼した．

これらの調査は相談協力員会の開催日である，2006年３月６日に行った．

４．分析方法

アンケート調査の分析は，SPSS 14.0 for Windowsを用いて行った．自由記述・グループワークの分析は，相談協力員が自由記述したカードおよびグループワークで集約したデータをコード化し，類似したものをカテゴリ化する方法によった．これらの分析にあたっては，研究者間で検討を重ねることにより信頼性・妥当性の確保に努めた．

５．倫理的配慮

研究の趣旨を書面および口頭にて説明し，同意書への署名を得た．書面には，知り得た情報の匿名性を厳守するとともに協力の有無による不利益は生じないこと，研究結果を知る権利があることを明記し，それらを遵守した．

結　果

１．アンケート調査結果

対象者の概要を示すと，当日の出席者数は44人中34人（77.3%）で，男性８人（23.5%），女性26人（76.5%）で，平均年齢は64.5±6.7歳，相談協力員の経験年数は平均3.3年であった．健康状態については，ほとんどが健康と回答しており，健康状態に不安を抱えている人が１人あった．受け持っている一人暮らし高齢者世帯数は，平均4.7世帯であった．

相談協力員の日頃の関わり方・今後の関わり方については，図１に示すように，一人暮らし高齢者に対する日頃の関わり方で多かったのは，顔を見かけたときの“声かけ”(94.1%)で，次いで“相談相手”と役割のあるときに“訪問”が（44.1%）であった．また，図２に示すように，一人暮らし高齢者への今後の関わり方に対する考え方で最も多かったのは，相談協力員としての役割終了後も“声かけを続けたい”（79.4%）で，次いで役割終了後も“積極的に努めたい”（47.1%），合併後も“委員を続けたい”（29.4%）であった．

２．自由記述およびグループワークの結果

１）一人暮らし高齢者に対する支援の内容

相談協力員の一人暮らし高齢者に対する支援の内容に関する自由記述およびグループワークで出された意見を分析した結果，81のコードが得られた．それらは表２に示すように，さらに24のサブカテゴリ，９つのカテゴリへと集約され，最終的に３つのコアカテゴリ，すなわち【暮らしの中での安否確認】，【近所付き合いの中での身近な支援】，【身近なネットワークづくり】が抽出された．

なお，本文中では，コアカテゴリを【 】，カテゴリを『 』，サブカテゴリを「 」で示す．

【暮らしの中での安否確認】では，外出時は対象者の家の近くを通り，それとなく「通りがけに雨戸の開閉を確認」したり，「通りがけに点灯の確認」や「通りがけに洗濯干しの確認」など，普段の自分の暮らしの中で，相手の日々の『暮らしぶりを観察する見守り』がなされていた．また，「道で会った時の声かけ」や寄り合いなどで「顔を見かけた時の声かけ」など『出会いを活かした声かけ』を大事にしていた．さらに，「訪問して様子を知る」や「遠方の人への電話での安否確認」，お土産や料理などの「お裾分けがてらの安否確認」など『機会を作っての安否確認』がなされていた．

【近所付き合いの中での身近な支援】では，「散歩に誘う」，「話し相手になる」など『ゆっくり過ごしながらの話し相手』になるための時間を作ったり，一人暮らし高齢者が「作っていない野菜を届ける」，「買い物や送迎を手伝う」など『さりげない暮らしの手伝い』や対等な近所付き合いをするために，相手の「人格を尊重した近所付き合い」や相手に「気遣いさせない見守り」など『程よい距離感を保った近所付き合い』を心がけていた．

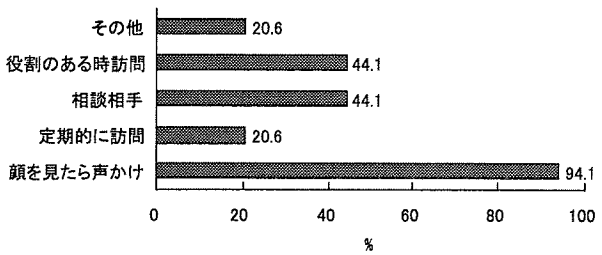

図１　一人暮らし高齢者に対する日頃の関わり方

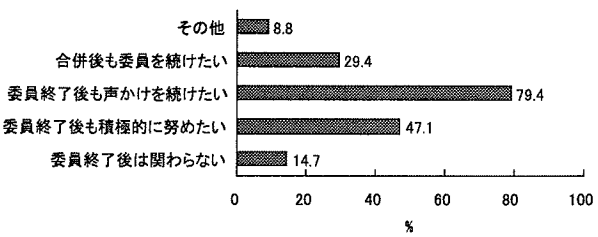

図２　一人暮らし高齢者への今後の関わり方に対する考え

表2　相談協力員の一人暮らし高齢者への支援内容

サブカテゴリ	カテゴリ	コアカテゴリ
通りがけに雨戸の開閉を確認	暮らしぶりを観察する見守り	暮らしの中での安否確認
通りがけに洗濯干しの確認		
通りがけに点灯を確認		
外出状況の確認		
風呂焚きの煙の確認		
道で会えば声かけ	出会いを活かした声かけ	
顔を見かけたら声かけ		
訪問して様子を知る	機会を作っての安否確認	
遠方は電話で安否確認		
お裾分けがてらの安否確認		
散歩や遊びに誘う	ゆっくり過ごしながらの話し相手	近所付き合いの中での身近な支援
ゆっくり話を聞く		
作ってない野菜を届ける	さりげない暮らしの手伝い	
買い物や送迎の手伝い		
人格を尊重した近所付き合い	程よい距離感を保った近所付き合い	
気遣いさせない見守り		
家族の関わりを把握	身近な情報ルートの確保	身近なネットワークづくり
近所の人に協力依頼		
相談協力員間の情報交換	関係者間の情報交換	
支援者との情報交換		
合併予定町との情報交換		
人と話ができる機会づくり	孤立しないための場づくり	
一人暮らし高齢者同士の交流の場づくり		
集会場開放化への提言		

表3　相談協力員が一人暮らし高齢者を支援する上で感じていること

サブカテゴリ	カテゴリ	コアカテゴリ
支援と事故発生との葛藤	役割遂行上の葛藤	葛藤を抱えての役割遂行
継続支援の窮屈感		
仕事と役割間での葛藤		
役割を通じて高齢者を知る	高齢期を学ぶ機会	

【身近なネットワークづくり】では，身内の訪問の有無など「家族の関わりを把握」したり，「近所の人に協力依頼」するなど地域の人々からのちょっとした情報をキャッチできる身近な情報ルートを確保し，細やかな情報が得られるための工夫をしていた．また，「相談協力員間の情報交換」や保健師，ケアマネージャーなど他の「支援者との情報交換」など『関係者間の情報交換』の重要性を認識し，支援を充実させようとしていた．また，隣近所が遠いという地域特性から，自分が役割を果たすという支援の域を越えた，「人と話しができる機会づくり」や「一人暮らし高齢者同士の交流の場づくり」など人との交流の必要性を認識していた．さらにそれを可能にするための「集会場開放化への提言」など，一人暮らし高齢者が『孤立しないための場づくり』について考えられていた．

2）一人暮らし高齢者を支援する上で感じていること

相談協力員の行う支援の内容を抽出する中で，相談協力員が支援する上で感じているいくつかの事柄が浮上してきたので，それらについて同様に分析を行った．その結果，8つのコードが得られ，それらは表3に示すように，3つのサブカテ

ゴリから2つのカテゴリへと集約され，コアカテゴリとして【葛藤を抱えての役割遂行】が抽出された．

相談協力員は，日頃の近所付き合いの中で，買い物や病院への送迎時に車に乗せてあげたい気持ちがあるものの，事故が発生した時の問題を懸念して躊躇している実態，つまり，「支援と事故発生との葛藤」を抱いていることがわかった．また，支援を休んだ時の不満が表出されることの懸念からくる“辞めるに辞められない”という「継続的支援への窮屈感」を抱いていることもわかった．さらに，仕事が多忙で時間を捻出できないことに対する「仕事と役割間での葛藤」があることも浮き彫りにされ，様々な『役割遂行上の葛藤』を抱えていることがわかった．

なお，様々な重荷や【葛藤を抱えての役割遂行】でありながらも，「役割を通じて高齢者を知る」ことや自己の高齢者像を描くことにもつながるなど，『高齢期を学ぶ機会』として受け止められていた．このように，支援することを肯定的に捉えている姿もみられた．

考　察

B町は山間部に位置し，高齢化の進行が著しい町である．隣近所が離れていることや公共交通機関の整備が乏しいという物理的環境であることから，一人暮らし高齢者にとっては，外出の困難さや地域社会との交流の持ち難さを伴っていることがうかがわれる．

高齢者が一人暮らしを成し得るためには，【他者との関係性】や【社会的基盤】が重要な要因の一つ[9]であることから，今回，B町の一人暮らし高齢者に対する住民による支援に注目し，近隣者として，その役割を最も担っていると思われる相談協力員を調査対象者とした．その支援の特徴は，地域や日常生活に根ざした自発的なものであると考えられた．それは，とくに生活共同体であることをベースにした日頃の暮らしぶりの中での“見守り”や“声かけ”，さらには積極的にアウトリーチする（手を差し伸べる）安否確認やゆっくり過ごしながら話し相手になるという，近所付き合いを核とした身近な支援にみられた．また，「気を遣われていると思わせない気遣い」など身近な近所だからこその行き過ぎのない支援になることに配慮がなされていた．すなわち，対象者が必要としているものや行為を普段から捉えた上での“さりげない気配り”や“行き届く支援”であった．しかし一方，地縁ならではの脈々と続く付き合いがもたらす近所への気遣いの重さを伴っていた．そのため，近所付き合いにおいては，でしゃばり過ぎない，程よい距離感を保ちながら相手を尊重する姿勢を殊更大事にしていた．また，不測の事態への懸念や仕事との兼ね合いなど葛藤を抱いていることも明らかになった．つまり，相談協力員の支援活動は，近所付き合いと役割遂行とのバランスをうまく調整することに苦労しながら支援しているという実態が明らかになったといえる．

なお，個人的支援に留まらず，近所とのネットワークの形成や今後の支援の方向性として，高齢者が孤立しないための話し合いの場づくりなど，体制面における工夫について発展させようとする姿もみられ，宮本がいう[13]“地域の底力”を実感できる．岡本[14]は，介護予防の重要なポイントは効果的な対象者把握であり，効果的な対象者把握の基盤は住民とともに推進する地域づくりで，そのためには住民同士の見守り合いと，住民による早期の対象把握機能を向上させる機会と場の設営が大切であると述べている．

今回の相談協力員への調査において，住民が行う役割遂行の特徴は，行政や専門職だけでは担えない同じ生活共同体で暮らす住民だからこその地道な支援活動であることを認めた．またこの活動は，岡本[14]が述べているように，介護予防のための効果的な対象者把握にもつながる活動であるといえる．

今後，一人暮らし高齢者に対する支援のあり方を考える上では，今回明らかになった住民が行う支援の特徴を活かした研修体制や協力体制を整備していくとともに，様々な葛藤や重荷を伴う役割を担った人々への支援という課題について考える必要性が感じられた．とくに，不測の事態発生時のボランティアへの援助や保障などリスクマネジメントについて検討することの重要性が示唆された．

結　論

一人暮らし高齢者に対する住民の行う支援の特徴は，近所付き合いを核とした【暮らしの中での安否確認】【近所付き合いの中での身近な支援】【身

近なネットワークづくり】であった．しかし，そこには，近所への気遣いや様々な【葛藤を抱えての役割遂行】の上に成り立っていることも明らかになった．

今後，住民が行う支援の特徴を活かした体制の整備と支援者である住民への支援という課題について検討することが，地域で一人暮らし高齢者を支えるためには重要であるといえる．

謝　辞

本研究にご協力くださいました相談協力員の方々をはじめ，関係者の方々にお礼を申し上げます．

文　献

1）厚生統計協会編（2006）国民衛生の動向・厚生の指標　53（9），p35－36.
2）厚生労働省監修（2003）“平成15年版厚生労働白書-活力ある高齢者像と世代間の新たな関係の構築-”，ぎょうせい，東京，p2－4.
3）高角健志（2003）高齢社会対策の総合的な推進のための指標づくりについて．保健の科学 45:868－871.
4）山口浩一郎，小島晴洋（2002）“高齢者法”，有斐閣，東京，p2－3.
5）朝日新聞社総合研究本部（2003）第25回定期国民意識調査，朝日総研レポート（160）:142－175.
6）直井道子（2003）「一人暮らし高齢者」の指標．保健の科学　45: 882－886.
7）染谷俶子（2000）“老いと家族　変貌する高齢者と家族”，ミネルヴァ書房，東京，p21－24.
8）合田加代子，高嶋伸子（2004）高齢者の一人暮らしを支える要因に関する研究—A町の一人暮らし高齢者の実態と高齢者保健福祉対策—．香川県立保健医療大学紀要　1: 11－18.
9）合田加代子（2005）高齢者の一人暮らしを支える要因に関する研究—脆弱化後期高齢者の『我が家』での一人暮らしを支える要因—．香川県立保健医療大学紀要　2: 43－51.
10）合田加代子（2005）脆弱化後期高齢者の『我が家』での一人暮らしを支える要因に関する研究．地域環境保健福祉研究　2: 43－51.
11）http://www.pref.kagawa.jp/toukei/香川県統計情報データベース.
12）綾上町発行（2004）綾上町独居老人状況調査資料，p1－2.
13）宮本ふみ（2005）暮らしにかかわる専門職としての保健師．保健の科学　47: 480－484.
14）岡本玲子（2006）介護予防と保健師の機能．保健の科学　48: 169－174.

Abstract

This study was conducted to develop a measure for safe life of elderly living alone in the community based on the status of activities by advisory helpers, who were organized to support elderly living alone in the town. A questionnaire survey among advisory helpers confirmed that they were actively engaged in their roles. An analysis of the status of advisory helpers' activities based on their comments in group work showed that their support was characterized by "confirmation of safety in daily life", "close support amid neighborly ties", "close networking" . It also revealed that advisory helpers' activities involved consideration for the neighbors and "mental conflict to fulfill their roles". To support elderly living alone in the community, it is seems to be important to build a cooperative framework based on the characteristics of support by residents, and to discuss the issue of supporting residents who support elderly living alone in the community.

受付日　2006年10月30日
受理日　2007年１月15日